共同研究グループ活動報告（2019年度）

日中関係史

2019年3月には論文集・『中国人留学生と「国家」・「近代」・「愛国」』（東方書店）を刊行し，その後，合計5回の例会を開催することができた。また，科研・教育交流（基盤B・一般，課題番号17H02686）の支援を得て，2019年9月には江蘇師範大学と中山大学で開催された研究会に研究メンバーが参加し，報告を行った。11月には台北で開催された「東アジア日本研究者協議会第4回大会」のパネルに参加した。以下，本年度に開催した研究会活動を箇条書きで記す。

⑴　第67回例会「阿部洋先生を囲む会」開催

◎日時：2019年5月25日（土）

◎場所：神奈川大学横浜キャンパス3号館406室

◎共催：中国人留学生史研究会，科研・教育交流（基盤B・一般，課題番号17H02686）

◎内容：

（一）「清末期日本の蚕糸業学校に学んだ中国人留学生について」王怡然（京都大学大学院博士後期課程3年）

（二）「清末，中国人日本留学生の近代国民意識の覚醒について ── 1896年から1901年までの留学生界に着目して」孫瑛鞠（岡山大学，非常勤講師）

（三）　特別講演 ──「我が教育史研究を振り返る」阿部洋（福岡県立大学名誉教授）

⑵　第68回例会の開催

◎日時：2019年6月29日（土）

◎場所：神奈川大学横浜キャンパス20号館212室

◎共催：中国人留学生史研究会，科研・教育交流（基盤B・一般，課題番号17H02686）

◎内容：

（一）「清末における湖北省留日学生と帰国後の行動」王鼎（新潟大学，博士課程）

（二）「満州国留学生と日本」李思済（一橋大学，博士課程）

（三）「戦後日華学会と華僑留日学生の招致」陳珂琳（東北師範大学，博士課程）

⑶　第 69 回例会「書評会 ── 著者との対話」開催
◎日時：2019 年 9 月 15 日（日）
◎場所：明治大学駿河台キャンパス・研究棟 2 階第 9 会議室
◎共催：明治大学史資料センターアジア留学生研究会，中国人留学生史研究会，アジア教育史学会，科研（基盤 B・課題番号 17H02686）
◎内容：
（一）『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』の書評
①土屋光芳（明治大学），②鈴木将久（東京大学），③張一聞（明治大学博士課程）
（二）『戦前期アジア留学生と明治大学』
①大里浩秋（神奈川大学名誉教授），②欒殿武（武蔵野大学），③中村みどり（早稲田大学），④見城悌治（千葉大学），⑤孫安石（神奈川大学）

⑷　第 70 回例会・国際円卓会議「日中関係史研究の新たな潮流 ── 摩擦・受容」の開催
◎日時：2019 年 11 月 16 日土曜日
◎場所：神奈川大学横浜キャンパス 3 号館 408 室
◎共催：中国人留学生史研究会，科研・教育交流（基盤 B・一般，課題番号 17H02686）
◎司会：孫安石（神奈川大学）
（一）「中国の留学生研究の最新動向について」周綿（江蘇師範大学・教授）
（二）「1920～30 年代，中国の留学教育問題争論」楊暁（遼寧師範大学・教授）
（三）「日中関係史と中国人留学生研究の意味」大里浩秋（神奈川大学名誉教授）
（四）「清国留学生と振武学校・陸軍士官学校について」浜口裕子（拓殖大学）
◎討論：川島真（東京大学），見城悌治（千葉大学）

⑸　第 71 回例会開催
◎日時：2019 年 12 月 21 日（土曜）
◎場所：神奈川大学 20 号館 212 室
◎内容：
（一）「朱紹文と日中戦争期の日本留学 ── 第一高等学校特設高等科・東京帝国大学経済学部を中心に」
田島俊雄（東洋文庫研究員）
（二）　研究会の運営報告
◎主催：中国人留学生史研究会，科研（基盤 B・課題番号 17H02686）

（文責　孫安石）

色彩と文化Ⅳ

「言語景観」を研究の軸とし,「観光」と「外国語教育」に応用できる理論的枠組みを模索しつつ言語ごとに調査・発表を行なっている。

⑴ 研究会の開催

第1回研究会

開催日：2019年8月6日（火） 14：00～16：00

会　場：国際文化交流学科準備室（17号館315室）

発表者1：鈴木慶夏（本学中国語学科教員）

テーマ：日本における中国語の言語景観の現状

　　　　── あなたが旅行者だったらどう思いますか？

発表者2：尹亭仁（本学国際文化交流学科教員）

テーマ：日本における韓国語の言語景観の現状 ── 韓国語教育への活用性と問題点

第2回研究会

開催日：2019年10月7日（月） 14：00～16：00

会　場：国際文化交流学科準備室（17号館315室）

発表者1：鈴木幸子（本学国際文化交流学科教員）

テーマ：日本における国際観光の現状と課題

発表者2：尹亭仁（本学国際文化交流学科教員）

テーマ：ロンドン・パリ・ウィーンの言語景観：観光の観点からの公共表示の比較

⑵ 海外調査

さらに，2019年3月12日～18日の7日間，ロンドンでの調査を計画している。2014年に発表したニューヨークでの言語景観との比較に加え，ロンドンにおける日本語，韓研究会実施後には，多角的な討議だけでなく，本研究課題が学術的にも実践的にも発展できるような方法論を議論する等，有意義な研究成果を導き出せるよう常に留意している。

- 尹亭仁：2019年7月25日～28日，台北
  [台北の言語景観を東京・ソウル・北京との比較の観点から]
- 尹亭仁：2019年8月18日～29日，ロンドン・パリ・ウィーン
  [ロンドン・パリ・ウィーンの言語景観を観光の観点から調査]
- 尹亭仁：2020年2月24日～3月1日，ブダペスト（予定）
  [ブダペストにおけるハンガリー語およびEU加盟国の言語景観の調査]
- 尹亭仁：2020年3月22日～28日，ニューヨーク（予定）
  [ニューヨークとヨーロッパ（ロンドン・パリ・ウィーン）の言語景観を比較の観点から調査]
- 李忠均：2019年9月1日～5日，ソウル
  [ソウル市・ソウル駅および周辺商業施設の観光視点による調査]

⑶ 国内調査

- 鈴木幸子：2019年7月29日～30日，平泉文化遺産および周辺地域
  [当該地域にて，主に外国人訪日観光客への言語対策を調査]
- 鈴木幸子：2019年8月20日，世界遺産富岡製糸場および周辺地域
  [当該地域にて，主に外国人訪日観光客への言語対策を調査]
- 鈴木幸子：2019年8月23日～25日，宗像・沖ノ島と関連遺産群および太宰府
  [当該地域にて現地学芸員の案内等により，観光情報・観光政策を含めた実地調査]

- 鈴木幸子：2019 年 9 月 15 日～17 日，大阪および関西国際空港周辺における観光スポット
  ［大阪市内にて外国人訪日旅行客に人気がある観光地を現地調査］
- 鈴木幸子：2020 年 2 日（予定），横浜中華街
- 佐藤裕美：2019 年 9 月 1 日～11 日，スイス・ティチーノ州ルガーノ
  ［スイスのイタリア語圏におけるイタリア語と他 3 公用語＋英語の言語景観における出現率を調査］
- 鈴木慶夏：2019 年 9 月 17 日～21 日，北海道東部における観光スポット
  ［阿寒摩周国立公園，知床国立公園および周辺地域を中国語圏からの訪日観光客視点で調査］
- 鈴木慶夏：2019 年 9 月 27 日～28 日，宮崎県宮崎市
  ［宮崎空港および宮崎市内を中国語圏からの訪日観光客視点で調査］
- 高木南欧子：2019 年 10 月 16 日～11 月 3 月
  ［神奈川大学横浜キャンパスの言語景観を留学生の視点から調査］
- 佐藤梓：2019 年 10 月 16 日～11 月 16 月
  ［白楽駅・みなとみらい駅周辺の言語景観を留学生の視点から調査］

2019 年度は，「多文化共生社会の言語景観 ── 観光立国日本の多言語表示と情報発信を再考する」という研究課題（代表者：鈴木幸子，メンバー 9 人）で学内の「共同研究奨励助成金」に応募した。2020 年度は本格的に研究活動を行なう計画である。

（文責　尹亭仁）

言語変異研究

1. 研究内容：今年度は主に古代中国の訓詁学者たちが施した敬語・ポライトネスの注釈について，歴史社会語用論の視点から体系的な調査と分析を行った。論文の執筆は，歴史語用論と歴史的言語景観に関するものを中心に行った。
2. 今年度の主な研究成果：
   「漢代訓詁學中的“禮貌”功能釋義 ── 歴史社会語用學探源」『国際漢語學報』（第 10 巻）上海學林出版社　2019 年 p25–47
3. 今年度主な研究所所蔵資料の収集：
   『明画全集・唐寅』浙江大学 2018 年
   『明画全集・仇英』浙江大学 2018 年
   『明画全集・徐渭』浙江大学 2018 年
4. 2020 年度は引続き歴史社会語用論と歴史言語景観について研究調査を実施する予定である。

（文責　彭国躍）

〈身体〉とジェンダー

1. 講演会・研究会の開催
   - 第 1 回研究会（講演会）
     開催日：2019 年 7 月 24 日（水）
     会場：17 号館 216 室
     発表者：熊谷謙介（本学外国語学部教授）
     演題「母・アメリカ・減退する性 ── ロマン・ガリにおける男性性」

2. シンポジウムの開催　　なし

3. 活動内容

〈身体〉とジェンダー研究会は『68年の〈性〉』を2015年度に出版したが，その後に続く企画として，男性表象をテーマにした叢書の出版を目指して発表を組織してきた。今年度については第1回研究会で，研究グループメンバーの熊谷謙介が「母・アメリカ・減退する性――ロマン・ガリにおける男性性」という演題で発表した。ユダヤ系の家系に生まれ，ロシア，ポーランドから母息子二人でフランスに移住し，第二次世界大戦に航空士として従軍，戦後，女優ジーン・セバーグと結婚し，彼女の死後自殺した，ロマン・ガリの小説作品を男性性の観点から分析するものであった。一見「マザコン」「冒険家」「マッチョ」にも見える彼の，ジェンダーに関する思想と，作品における複雑な男性像を示し，とりわけ母息子の関係やユダヤ性と男性性の関係について議論を行った。

また2017年度から2019年度までの研究会をもとにして，学内のメンバー，また20世紀ドイツ表現主義をジェンダーの観点から分析する西岡あかね氏（東京外国語大学），クィア・スタディーズを中心に研究を進める菅沼勝彦氏（タスマニア大学），2018年度に本学を退職したアメリカ文学を専門とする山口ヨシ子名誉教授，中国近代文学を専攻する中村みどり氏（早稲田大学）にも執筆をいただき，神奈川大学人文学研究叢書44『男性性を可視化する――〈男らしさ〉の表象分析』（青弓社，2020年2月）を完成させた。叢書目次については以下の通りである。

序　文　マスキュリニティ，二十世紀，表象　　熊谷謙介
第1章　表現主義のマチズモとアウトサイダー性　　西岡あかね
第2章　新しい男の誕生？――ダダにおける「新しい人間」のマスキュリニティ　　小松原由理
第3章　洪深のアメリカ留学体験――自伝における人種差別・恋愛，そして演じること　　中村みどり
第4章　男らしくない西部劇小説『シェーン』――冷戦期アメリカの核／家族　　古屋耕平
第5章　「人間らしさ」への道，「男らしさ」への道――エリソン『見えない人間』　　山口ヨシ子
第6章　母，マジョリティ，減退する性――ロマン・ガリと男性性　　熊谷謙介
第7章　翔ばなかった王子――マシュー・ボーン版『白鳥の湖』にみる男性性と現代社会　　菅沼勝彦
第8章　現代美術にみる狩猟と男性性――おとぎ話研究の視点から　　村井まや子

今後は本叢書について議論し合う研究会を開催し，「〈身体〉とジェンダー」研究グループが今後どのような主題のもとで，研究会を続けていくかを検討する予定である。

（文責　熊谷謙介）

自然観の東西比較

1. 講演会・研究会の開催

第1回研究会（講演会）

開催日：6月26日（水）
会　場：17号館216室
講演者：黒住真（東京大学名誉教授）
演　題：「人文学研究叢書43『自然・人間・神々――時代と地域の交差する場』を読む」

第2回研究会

開催日：7月31日（水）
会　場：17号館216室
報告者：山本信太郎（本学外国語学部准教授）

演　題：「聖ウィニフリッドの泉への巡礼 ── 夏至の祭礼行列とミサを中心に」

2. 活動内容

本研究グループは，2019 年 3 月に人文学研究叢書 43『自然・人間・神々 ── 時代と地域の交差する場』を刊行した。本年度は，その内容を振り返る研究会（講演会），および研究を継続した調査報告についての研究会を行った。

第 1 回研究会（講演会）では，東京大学名誉教授である黒住真氏をお招きして，『自然・人間・神々』の全体および個々の論文についての批評を講演して頂いた。質疑応答を含め，活発な議論が交わされた。黒住氏の指摘は執筆者にとって，また研究グループにとっても視野を広げる契機となる有益な内容であった。

第 2 回研究会は，『人間・自然・神々』で「ウェールズにおける聖なる泉への巡礼 ── 中世から近世の聖ウィニフリッドの泉」を著した山本先生が，継続研究として聖ウィニフリッドの泉にかかわる祭礼について現地調査を行った結果の報告・研究会である。ここでも活発な議論が交わされ，特に「水」をめぐる思想・宗教的な問題が浮上し，研究グループにとっての新たな研究の方向性を示唆することとなった。

退職された名誉教授・伊坂先生は，客員研究員として本研究グループの研究会に参加されつつ，独自の研究活動を継続されている。その成果を，2019 年 10 月 11 日から 12 月 6 日にかけて 5 回の公開講座「世界史の中の日本文化 ── 先史・古代篇」（神奈川大学生涯学習・エクステンション講座）で報告された。その内容は，『自然・人間・神々』で著されたヘーゲルの『世界史の哲学講義』（伊坂訳，講談社学術文庫上・下）に関する論考を基盤にして，ヘーゲルが書かなかった日本の文化を世界史の中に位置付けるべく発展させたものである。

今年度は，研究会の開催は少なかったが，メンバーそれぞれが研究を継続し，グループとしても自然観に関する新たな具体的テーマを模索しつつある。

（文責　上原雅文）

ヒト身体の文化的起源

活動内容

① 人間の身体を系統的に遡り，その根源を考察することで，身体が持つ機能的な意義を検討した。

Ⅰ. ランニング時の足着地法の違いがアキレス腱長や筋束長に及ぼす影響に関する論文「Forefoot running shorter gastrocnemius fascicle length than rearfoot running」が Journal of Sports Sciences 誌に掲載された。

Ⅱ. アキレス腱の屈曲点の位置と増幅効果との関係性を調べた論文「Biomechanical gain in limb displacement from the curvature of the Achilles tendon: role of the geometrical arrangement of inflection point, center of rotation, calcaneus」を執筆し，投稿した。

Ⅲ. 以下の研究セミナーを開催した。

「J リーグトップチームにおけるゲーム分析 ── 横浜 FC におけるアシスタントコーチの役割 ── 」竹中達郎氏（横浜 FC トップチームアシスタントコーチ），1 月 10 日

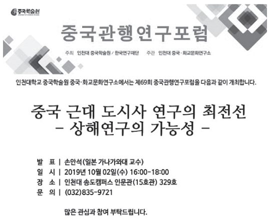
（文責　衣笠竜太）

NCH 新聞研究会

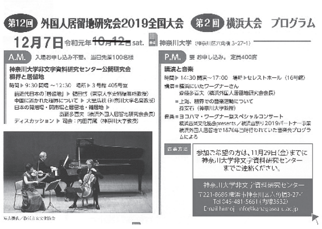
1. 研究内容：本研究会は，神奈川大学が所蔵する NCH（North China Herald）新聞（ONLINE 版）の日本，中国，韓国，東南アジア諸国に関連する新聞記事の研究を目指している。

2. 活動内容：

（一） 2019 年 10 月 2 日，韓国の仁川大学で行われた招待講演「中国近代都市史研究の最前線」で神奈川大学が所蔵する NCH（North China Herald）新聞のデータベースを紹介することができた。



（二） 2019 年 12 月 7 日に開催された「外国人居留地研究会 2019 年全国大会」の午後の部「講演と音楽」において「上海租界での音楽活動について」の報告を行った。同報告の主な内容は，神奈川大学が所蔵する NCH（North China Herald）新聞のデータベースを利用した研究成果であった。



（文責　孫安石）

日韓対照言語研究

「日韓対照言語研究」は「日韓両言語におけるヴォイス・テンス・アスペクト・モダリティの対照研究」を課題として掲げ，研究活動をすすめてきた。2020 年度からはすそ野を広げて中国語を加えた形で，「日中韓対照言語研究」を本格的に稼働させる計画である。

⑴ 研究会の開催

日時：2019 年 7 月 22 日（月） 17：00～19：00

場所：国際文化交流学科準備室（17 号館 315 室）

発表者 1：尹亭仁（本学国際文化交流学科教員）

テーマ：「空間と時間表現における助詞「ノ」について

── 日韓対照言語研究の観点から」

発表者 2：相沢勇輝（本学外国語学研究科中国言語文化専攻博士課程）

テーマ：「空間と時間表現における助詞「ノ」について

── 日中対照言語研究の観点から」

年2回以上の研究会を計画しており，来年度は対照言語研究の観点から中国語や英語のテンス・アスペクトの研究者にも発表してもらう予定である。また海外で対照研究を行なっている研究者にも発表と交流の機会を持つ計画である。

（文責　尹亭仁）

各国近代文学の研究

1. 講演会・研究会の開催

第1回研究会（講演会）
開催日：2019年7月19日
会　場：17号館216室
発表者：千石英世氏（立教大学名誉教授）
演　題：モダニズムの芸術と文学

第2回研究会（講演会）
開催日：2020年1月31日
会　場：17号館216室
講演者：山﨑彩氏（東京大学特任研究員）
演　題：アドリア海北部の多民族共生地域におけるイタリア語文学

2. 活動内容

本研究グループは，活動3年目である。研究対象の時期的な重なりを基軸に据えながらも，研究をめぐる方法や環境・場の異なりについて相互に意識し，意見交換をしながら，領域横断的な近代文学研究の方向性を模索していく。今年度は，2回の講演会を開催し，ゲストを招いた講演を開催し，専門領域を異にするメンバーがそれぞれの立場から質疑・意見交換を行い，お互いの知見を深めた。

（文責　松本和也）

知覚認知システムの普遍性と多様性

講演会・研究会の開催：なし
シンポジウムの開催：1回
The 1st Symposium on Perception and Cognition Systems for Nature of Plausibility
Date and time: Friday, 29 November 2019, 15:30–18:00
Venue: Room 402 on the 4th Floor of Building 3, Yokohama Campus, Kanagawa University, Kanagawa, Japan
Program
Professor Nick SCOTT-SAMUEL (Psychological Science, University of Bristol)

“Defensive coloration: somethings we know, and some things we'd like to know”

Over the last decade or so, there has been an explosion of interest in the principles that might underlie camouflage: how can one prevent or disrupt the detection, identification, selection or targeting of a prey item? These sorts of question are best addressed from an interdisciplinary perspective, drawing on the knowledge of biologists and psychologists amongst others. I will give an overview of what we know so far, with particular reference to research from CamoLab (www.camolab.com), and then talk about some outstanding issues, in particular attempts to categorise and quantify different camouflage

strategies.

Assistant Professor, Kentaro ONO（Brain, Mind, and KANSEI research center, Hiroshima University）

"Effects of perceptual grouping in the brain processing of sounds"

What is perceptual grouping? Perceptual grouping occurs when we are perceptually put parts together into a whole. Auditory inputs are a mixture of sounds produced by several simultaneous sources. However, we rarely perceive these sounds as incomprehensible noise. While psychological studies have found several principles for perceptual grouping, neural correlates of perceptual grouping remain unclear. Here, I shortly review some neuroimaging studies of perceptual grouping and introduce our studies that have shown neurophysiological correlates of it.

活動内容：

本研究グループは，人の知覚・認知の仕組みについて，研究することを目標としており，特に，知覚的様相や認知的様相に共通な普遍性とそれらの様相の相互効果によって展開した多様性を現象・行動観察や計算論的解析などを通して明らかにする活動を行うために共同で取り組んでいる。

本年度は，「尤もらしさ感と違和感の知覚・感性・認知科学的機序の解明」を促進するために，当該分野の国内外の第一人者の研究者２名に公演を依頼し，参加者による活発な議論とともに盛況に終わった。

（文責　吉澤達也）

学びの見える化研究会

⑴　研究会の趣旨

専門職等の人材育成の見える化を行い，教育・学習のあり方や体系化を検討する。

「学び」に関わる各自の研究テーマを持ち寄り，研究報告及び意見交換を行う。

⑵　各自の研究テーマ

①学内研究者

テーマ１「潜在的ボランティアの力をいかに引き出すか」
齊藤ゆか（神奈川大学人間科学部・教授）

テーマ２「学校体育におけるダンス授業の指導観の育成について」
太田早織（神奈川大学人間科学部・助教）

②学外研究者

テーマ３「人材育成の見える化を進める方法論」
森和夫（株式会社技術・技能教育研究所・代表取締役・神奈川大学人文研究所・研究員）

テーマ４「青年教育――個人化と社会化の一体的支援／子育て支援――子育て学の体系化」
西村美東士（聖徳大学・元教授，神奈川大学人文研究所・研究員）

③参加メンバー

テーマ５「若年無業者に対する支援のあり方に関する検討」
新宅圭峰（認定特定非営利活動法人育て上げネット・役員）

⑶　研究日の日程

４月20日，５月18日，６月８日，６月15日，６月29日，７月６日，７月20日，９月７日，９月21日，10月19日，10月26日，11月２日，11月16日，12月14日，12月21日，１月11日，１月25日，２月15日，２月29日（全19回，これから実施予定も含む）

⑷　研究の成果（報告）

齊藤ゆか（2019）「『潜在的ボランティア』が活動に踏み出す条件設定と環境づくり」『生活経営学研究』54，pp. 50–59

新宅圭峰，工藤彰子，齊藤ゆか（2019）「NPO における『電子カルテシステム』導入の効果性 ―― 教育 ICT とそれを活用する業務プロセスの実装 ―― 」『神奈川大学心理・教育論集』（46），pp. 97–111

森和夫（2019）「人材の見える化が可能にする能力開発～CUDBAS 手法による能力マップ作成で効率的な人材育成を実現する～」『企業と人材』pp. 33–39，産労総合研究所。

森和夫（2019）「充実した院内教育につなげる組織・部署にあわせたラダー作成～クリニカルラダーと能力マップが拓く院内教育の新しい姿～」『看護人材育成』Vol. 6 No. 2，pp. 2–8，日総研出版。

森和夫（2019）「ものづくりを支える技能とその継承のあり方～これから求められる技能とは何か，次代へ継承するにはどうするか～」『職業研究』巻頭言，p. 3，雇用問題研究会。

森和夫（2019）「能力把握に基づく人材育成の方法～求める人材像，今いる人材の能力マップを作成して，人材育成の方針から指導育成までを効率的にする方法～」一般財団法人　職業教育開発協会，セミナーテキスト 50 頁。

森和夫（2019）「暗黙知指導の理論と実際～生産性を向上させる暗黙知の指導は重要課題，その理論と実際を演習で学ぶ講座～」一般財団法人　職業教育開発協会，セミナーテキスト 60 頁。

西村美東士（2019）「体験的リカレント論」，全日本社会教育連合会企画・日本青年館『社会教育』876 号 pp. 24–30

西村美東士（2019）「子育てボランティアの学習プログラム作成と資格認定～「現場力」を支える子育て支援学の体系化をめざして～」日本子育て学会第 11 回大会報告

（文責　齊藤ゆか）

臨床心理学研究

2019 年度の活動

2016 年に公布された公認心理師法によって，日本で初めて心理職の国家資格が誕生したが，2019 年度は公認心理師についての研究を行った。日本では長く文部科学省が関わる民間資格である臨床心理士（日本臨床心理士資格認定協会）が代表的な心理職の資格であったが，国家資格である公認心理師は民間資格の臨床心理士とは違う法的な責務があり，違反により刑事罰の対象にもなり得るなど，様々な相違点がある。本研究グループでは，この臨床心理士と公認心理師の違いについてメンバーそれぞれが理解を深め，共有する研究活動を行った。

（文責　杉山崇）